

タ リ タ ・ ク ム

# “Talitha, koum”

「少女よ、私はあなたに言う。起きなさい」(マルコ5:41)

日本聖公会 正義と平和委員会・ジェンダープロジェクト

第25号

2015年10月25日

〒162-0805

東京都新宿区矢来町65

日本聖公会管区事務所気付

正義と平和委員会

・ジェンダープロジェクト

TEL 03-5228-3171

発行責任者: 大岡左代子

## 「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者がまず、この女に石を投げなさい」

私の故郷、平澤（ピョンテク）は基地村

大韓聖公会 釜山教区 浦項（ポハン）聖堂

補佐牧師 執事 趙 明淑（チョウ ミヨンスク）



朝鮮半島の南北分断70年と植民地解放70年は、日本の戦後70周年と切るに切れない歴史です。日本の戦後70年を記念するこの特集ニュースレターに、平和を求める者として韓国人の戦後の物語をお伝えできる機会を与えてくださった、日本聖公会の皆様へ感謝します。

私はこの紙面をお借りして、韓国の基地村の女性たちの物語を分かち合おうと思います。戦争と平和について再確認するためには、痛みを継承し、繰り返してはならない事があるからです。

私は戦争を直接経験してはいません。しかし基地村を身近に感じて育ち、国際結婚をした隣人を通して、たとえ戦争が終わっても、痛みは続いてゆくことを痛切に感じました。日本の米軍基地が沖縄に集中しているのとは違い、韓国の基地村は全国に散らばっています。1945年8月15日、日本の敗戦で、日本軍が韓国を離れる際、残した基地に米軍が駐屯軍として配置されました。日本軍は強制占領軍でしたが、米軍は解放のための占領軍でした。

日米の協力関係は、米軍が去った後の基地、クラブの天井等に残っています。日章旗が残っており、乗馬訓練の道はジープの車道となり、補給倉庫は飛行場になりました。この村の小川には多くの男性と女性が、従軍のためまた慰安婦として運ばれた歴史が刻まれています。戦後、多くの人々が飛行場建設の話聞いて、仕事を求め集まったのが基地村の始まりです。

1970年代になって、米軍基地村は文化的にも、雰囲気も国際的都市の性格を持つようになります。一般農村から思いもよらない別世界でした。住民たちは米軍と娘が結婚をすることを、お金持になる成功の雛形とし、海外に移住し、順調に生活するための道と考えました。村では、そのためには娘たちが綺麗で賢くなければならないと思われました。

最初、米軍を相手にした人たちは、売買春で生計を立てた女性たちでした。身体の対価としてもらった軍物資と缶詰は密売され、警察によって押収されたりもしました。女性たちの消費によりお金が流通し、美容院、旅館(ラブホテル)、飲み屋とオーダーメイドの洋服店が繁盛し、客引きが横行し、色とりどりに着飾る夜の街を牛耳っていた女性たちが、まず海外

へと流れて行きました。この人々の姿によって人々はアメリカン・ドリームを夢見ました。しかしその女性たちの中には、精神的苦痛に耐えられず常軌を逸する人々や、お酒とタバコの依存に陥る人々、子どもを産み生きて行こうとしても、捨てられ飢えて死ぬ人々、殺害されたことも隠された人々も数少なくありません。周りの住民たちは彼女たちを他人と見ており、彼女たちの夫の暴力も見て見ぬふりでした。この路地あ之路地で混血児たちが哀れに生きていましたが、ほとんどが海外に養子縁組されて行きました。そのような女性たちの多くを国際結婚させ外国で仕事につけるよう助けた人たちもいましたが、英語が出来ないため仕事がなく、アメリカ社会に暮らしはしましたが、廃人となった女性も少なくありませんでした。ある一人の女性は、戦後寡婦になったある母親は育児の大変さから、退役米軍人の世話し過ぎましたが、また一人になってしまい、住民たちは彼女を肩身の狭い状況に追いやりました。今は80歳を越えましたが、その軽視と蔑みはひとり息子をアルコール依存症にさせました。朝毎に涙を流しながら、子どもを育てるため仕方がなかったことと時代を恨みながら祈りを捧げ、息子は牧師になりました。

身分の如何を問わず戦時中に体験した強姦はもっとぞっとします。釜山市長の妻だった女性は、市場でUN軍として韓国に来たイタリア兵によって妊娠したのですが、家族から赦されませんでした。赤ん坊と一緒に追い出され、母親は子どもと一緒に生きなければならなかったのですが、混血の子を産んだことは隠すことができませんでした。

子どもが大きくなりながら受けた差別は人間として耐えがたいものでした。学校に通うのも大変で中退しました。人目を避けて、洞窟で過ごし、公園の鳩を取って食べてまで生きなければなりません。自分の様な子どもが生まれてはならないと自ら不妊の体になることを選びました。それでも母親が経験した一生の苦しみを訴え、同じ痛みを経験した人々と連帯して戦っていますが国や軍隊は無視し続けています。世の中の誰も心を寄せようとはしません。

国際結婚に成功したこのアメリカ国籍を持つ女性は終身刑を受けています。夫が自分を捨てようとするのを友達等に訴えましたが、個人の問題として扱われ、誰も聞いてくれませんでした。あちこちの教会にも行って訴えましたが、10万ウォン(日本貨幣=1万円)ほどのお金を渡され、来るなど言われたこともあるそうです。とうとう子どもを夫に奪われないように母親は、最悪の方法をとり、天使の様な息子と娘を殺し、自らも命を絶とうとしますが、死ぬこともできませんでした。彼女を弁護してくれる人は誰もいないまま、監禁され、面会も禁じられました。

私が住んでいる村の、あるお婆さんは亡くなられてから1週間が過ぎて発見され、保健所で火葬しました。彼女が一人で亡くなったのも、米軍を相手にした女であるからという理由でした。この世の誰も戦争中、貧しさに耐えながら生きなければならなかった女性たちの話に耳を傾けません。彼女たちにとって戦争はまだ終わっていないのです。

米軍を相手にした女性たちは地域の住民たちから、日本軍慰安婦も同じように扱われました。このように米軍は自分たちの相手をした女性たちが地域の住民から冷遇されている状況を知りません。戦争が終わり、皆が平和な日常の中で生きているこの時代にも、まだ終わらない女性たちの物語は続いています。

不当な SOFA 協定のせいだと、社会は彼女たちの物語に耳を貸しません。近隣の住民たちの無関心と冷たい態度は、自分たちとは関係の無いことと言う思いだからです。占領軍の軍隊の周辺では、今も多くの女性たちが補充品の様に扱われています。どんな方法で、また幼い娘たちが利用されるかは誰も知りません。このような女性たちへの暴力が繰り返されることのないようにする責務は、生き残っている私たちにあります。女性が生命を産んで育てられるように祝福して下さる神さまの摂理を大切にして支えることは命への平和の道です。

娘たち、女性たちは軍隊の裏にある暴力を直視しなければなりませんし、共同の命への連帯が必要です。私たちは神様が与えてくださった平和の道を歩む時、真の和解と命が生かされるのでしょうか。お読みいただきありがとうございます。 (翻訳：後藤香織、金善姫)



## 日本軍性奴隷制度を日本の宗教文化から問う

アムネスティー・インターナショナル日本  
慰安婦問題チームコーディネーター 山下明子

「慰安婦」被害者が初めて名乗り出て、日本政府を提訴してから 24 年になります。日本軍「慰安婦」の存在については、兵士の話だけではなく公刊された日記や実話小説などによっても早くから知られていました。しかし、日本政府が調査を始めたのは被害者に提訴されてからです。その調査によって、慰安所が当時の軍当局の要請によって作られたこと、意志に反して「慰安婦」にされた女性が多かったことを政府は初めて認めました。その後、歴史学者たちが「慰安婦」の強制連行をふくむ文書資料を数多く発見し、国際法学者による研究もすすみました。

ところが、日本は「慰安婦問題は法的に解決済み」の立場をとっています。性奴隷制だったことについても認めず、被害者たちが求める正義、つまり事実を認めて公式の謝罪と賠償をすることを拒んでいます。

国連の人権諸委員会からの勧告をはじめ国際的批判に晒されながら、日本はなぜ被害者と向き合うことができないのでしょうか。キリスト教を含めた日本の宗教文化・社会を問う視点で考えることができます。①宗教的な天皇制国家のタブーが戦後も続いており、旧軍および国家の最高責任者としての天皇の責任を問えない。主権在民の民主主義が国会で機能していない。②天皇のタブーを内面化した社会は外からの批判に対して弱く、集団で歴史修正主義に走りやすい。③「慰安婦」問題は女性への性暴力であり人権侵害ですが、日本の宗教文化は「女の人権」という概念を理解できません。

現安倍政権は、閣僚 19 人の内、公明党の一人を除いて全員が神道政治連盟国会議員懇談会会員です。この会には 289 人の国会議員が参加しており、安倍首相が現会長です。さらに神道・仏教系の宗教団体に学者・文化人も広く加わった愛国主義政治団体の「日本会議」の国会議員懇談会には 19 人中の 15 人が、クリスチャンの 3 人を含めて、加入しています。女性閣僚は 4 人全員が中心的な会員です。両団体は、天皇を元首とする自主憲法の制定、愛国心の教育の義務化、靖国神社の国家儀礼化などを目指しています。

2007 年に第 1 次安倍政権は「慰安婦を強制連行した証拠はない」と閣議決定しました。現在もそれを維持し、国内外での宣伝のために右派メディアとも連携しながら莫大な公費を使っています。市民団体の情報公開請求により政府所有が明らかになっている資料についても、「日本政府保有資料の全面公開」を求めると、回答は黒塗りにされています。国会の委員会においても政府関係機関の責任の転嫁合戦が行われており、国会よりも閣議決定が優先されているのが実態です。

日本軍「慰安婦」問題は強制連行の有無だけの問題ではありません。しかし、戦前の日本には官許の人身売買である公娼制度がありました。近代化と富国強兵をめざした明治新政府は、それ以前の性の文化を変えて、女性の性のみをダブルスタンダードで厳しく管理しました。天皇制家族国家主義における「良妻賢母」と「醜業婦」(娼婦)の差別化です。国家神道下ですべての宗教がこれを受け入れてきました。教義上では出家者であるはずの仏教僧も妻帯して家族をもち、時には遊郭で「醜業婦」を買いました。一部のキリスト教徒は廢娼運動をしましたが、公娼は近代国家の恥だという考え方からでした。しかも公娼制度を廃止した県では私娼が増え、借金返済のために「慰安婦」になった元公娼も多いわけです。

現在もキリスト教が教会内の性暴力に向き合うことができないのは、このような家制度によるジェンダー意識があるからでしょう。

戦争中も戦後も、また被害者が名乗りでた後も、日本の宗教界が「慰安婦」問題に沈黙を続けているのは、一つには女を買う文化が変わっていないからです。戦後の政教分離のタテマエによって、既成教団が政府の方針を批判しないということもあります。これは宗教学やキリスト教などの関連学会も同様です。

しかし、日本の植民地と占領地、戦闘地において、将兵による性暴力と虐待、拷問などで心身を痛めつけられ、消えない恥辱感と神経症を抱えて生きている無数の被害者の現実において、「慰安婦」問題は人身売買だけではけっしてくくれません。実際、奴隷以下に扱われた女性たちも数多いのです。

日本軍「慰安婦」問題は、1990 年代半ばから、第一次安倍政権(2006~07 年)、第 2 次安倍政権(2012 年 12 月~現在)をピークとして、「日本会議」を中心とする歴史修正主義のターゲットにされてきました。民間の右翼団体によるネット上と路上での被害者に対する露骨なヘイトスピーチも公認状態です。ここに「幸福の科学」やキリスト教系の政教一致型の愛国主義の宗教団体が加わり、「慰安婦」問題を左翼による戦後の捏造だとして全否定するキャンペーンが国内外で行われています。皮肉なことにここには指導的な女性も多い。

日本の女性の地位は、世界経済フォーラムによる世界 135 カ国のジェンダーギャップ指数においても毎年、最下位グループに属しています。とくに政治と学界において悪いのです。日本軍性奴隷制の問題は、天皇制文化と社会に阻まれて、日本のフェミニズムと女性運動の結節点になりませんでした。その結果、沖縄や被差別部落出身者などにとくに多いと推定される日本人被害者が名乗りでることができないままであり、日本の内側からの真摯な問題解決を阻んでいます。

(これはシカゴ大学神学大学院のオンライン出版サイトである Sightings の 2015 年 9 月 4 日号の拙稿をほぼ和訳したものです。)

## 「命どう宝」恒久平和を願う沖縄の心 ～石原 絹子司祭の手記より思う～

『沖縄戦は、日本における唯一の地上戦であり、太平洋戦争で最大規模の戦闘でした。90日あまりにおよんだ鉄の暴風は島々の山容を変え、20 万余の尊い命と財産を奪い去りました。沖縄戦の何よりの特徴は、一般市民の戦死者が軍人よりはるかに多かったところにあり、その数は10 万あまりにも及びました。ある者は砲弾で吹き飛ばされ、ある者は追い詰められて自ら命を絶ち、またある者は敗走する自国日本兵の犠牲にされました。

想像を絶する極限状況の中で、私達沖縄県民は戦争の不条理さと残虐さを身を以て体験しました。この悲惨な戦争体験と、戦後米軍支配の重圧に抗しつつ、私たちが培ってきたのは、恒久平和を求める沖縄の心、“命どう宝”の原点であります。人間の尊厳を何よりも重視し、戦争につながる一切の行為を否定し、平和を求め、人間性の発露である文化をこよなく愛する沖縄の心であります。

私たちが一番大切に思っている平和、それは黙って向こうからやって来るものではありません。どんな小さなことでも平和を実現するために努力を惜しまず、また戦争につながるようなことは、どんな小さなことでもその芽を早く摘み取っておかねばならない、と思うのです。私たち自身の手で、平和を創りだしていかねばなりません。そのためには、憲法九条見直しの動きや教科書の問題、米軍基地の問題など様々な場面で自分の意見をしっかりと示すこと、反対すべきことにははっきりと反対すること、が大切だと思います。団結は力なり、と申します。共に祈り、力を一つにして明るく平和な社会の構築のために努力してゆきたいものであります。』（『那覇の語り部 石原絹子の手記』2009年より）

沖縄教区の退職司祭であられる石原絹子司祭は、小学校一年生の時に沖縄戦で両親と兄妹5人の命を奪われました。ひとりぼっちになった石原司祭は、何度も「どうしてお母さんは死んだの？」と祖母に聞いて困らせた、と言われます。祖母は「戦争が悪いの。二度と戦争のない世の中にするのがあなたの役目よ」と彼女に言いました。その言葉を胸に沖縄戦の語り部を続け、「平和」を訴え続けておられます。石原先生の一家は、日本の皇軍兵士に防空壕から追いだされて戦禍の中へ放り出されます。母と兄、妹たちの死と共に戦禍の中をぐり抜けつつも、自分ももう死ねる、やっとなると思ったとき、米軍兵に助けられます。そして米軍兵の腕の中で目をさましたその時、放心状態だった彼女の目に止まったのは、米軍兵の胸に揺れる金の十字架だったそうです。「十字架は不思議にも私のその後の人生を支え、生きる力、生きる希望を与えてくれました」と石原司祭は語ります。

戦後70年の今年、政府は「安全保障関連法」を強硬に可決させ、日本を戦争のできる国へと変えようとしています。辺野古への基地移設についても、政府は沖縄の民意をないがしろにしています。沖縄の戦後は70年経っても終わっていません。本当の平和とは何か、教会は誰の立場に立って「平和」を語るのか、私たち自身の問題として考え続けたいと思います。

（石原司祭の許可をいただいて手記から抜粋、編集しました。文責：大岡左代子）



## 広島平和礼拝2015を終えて

広島平和礼拝実行委員／神戸教区・広島復活教会信徒  
ステファニア浜井美喜

「広島でも平和行事ができないだろうか」。今から10年前、沖縄の礼拝に出席された小林尚明司祭が呼びかけられ、中村豊神戸教区主教が「教区礼拝として応援するので、ぜひやって欲しい」と言われて、平和礼拝が始まりました。話し合いを重ね、目的として、

- 1.原爆犠牲者を追悼し、世界の平和のために祈る。
- 2.次代を担う人たちに原爆の悲惨さ・戦争の愚かさを伝える。
- 3.「キリストの平和」を学び、その実現のために活動する。

が決まり、「そして一步、前へ ～One step forward～」を標語として掲げました。

2006年に、かねてから様々な活動を共にするようになったカトリック広島司教区との合同で、平和の祈り・平和行進・平和祈願ミサが始まりました。

2007年からは、各教区から聖職者1名・信徒1名の滞在費を実行委員会が負担し、参加していただくようになりました。また、若い世代に多く参加していただくため、参加する生徒・学生に補助を出す「ヨハネ資金」(通称)が篤志の方から実行委員会に託されました。

内外からの沢山の支えと祈りがあり、本当に感謝でしたが、やはり会場の広島が主導して取り組まなくてはなりません。地方の1教会にどれほどのことができるのか。予算は、宿の確保は、プログラムは。次々と起きる問題に右往左往しながら10年が過ぎました。

被爆から70年の節目の今年、2015年の平和礼拝は今までの集大成ともいえるものとなりました。11教区すべての主教・大韓聖公会の金根祥主教・WCCの巡礼団も参加され、カトリックとの合同プログラムも例年より豊かで、参加しやすいものとなりました。

復活教会では、オリーブの会(女性会)と男子会が、会場設定、看板作り、受付、オルター、食事・ティーブレイクの準備、清掃、など、ありとあらゆることを引き受けてくださいました。人手の少ない教会で全国からゲストを招いて行事をするとすると、原則、仕事は分担して、できる人ができることをする、ということになります。女性が椅子を運び、男性が昼食

のハヤシライスを作る、といったことは極めて自然なことでした。要はそれぞれができることを精一杯する。単純なことです。

被爆された年配の信徒の方々のことも忘れられません。原爆や戦争の記憶が風化していくことは「思い出したくない記憶」「戦争の恐怖」が薄らいでいくことであり、心や身体に大きな傷を負った人々にとっては、時間に晒されることで癒される部分もあります。塞がった傷口を開くような被爆証言をお願いしてよいものだろうか? 「原爆を語り継ぐこと」の困難さに私たちは何度か向き合わされました。実行委員会の依頼に応じて、いままで何人かの女性信徒の方がご自分の



被爆体験を平和礼拝の中でお話してくださいました。普段はおっとりとした、物静かな方々です。ご本人達は「辛いから話したくないけれど、若い方達のお役に立つなら」とおっしゃって、全国から集まった人々の前で辛い体験を、感情を抑えて詳しく語ってくださいました。今年はその中の1人のお孫さんが「高校生の平和活動」について発表され、会場から感動の声と大きな拍手がありました。

主の平和のために、宗派も性別も年代も国籍も、あらゆるへだてを越えることが私たちに求められております。広島平和礼拝においても、道なお遠く、不完全な部分もたくさんありますが、この礼拝が「へだてを越えて平和を実現する」1つのモデルになるよう、これからも努力して参りたいと思います。

## キリストの平和があなたがたの心を支配するようにしなさい。 コロ3:15

被爆70年長崎原爆記念礼拝 ～死の同心円から平和の同心円へ～

長崎聖三一教会 司祭 マルコ 柴本孝夫

静かな水面に石を一つ落とすと、ポチャンという音とほぼ同時に中心から外側に向かって幾重もの波紋が広がって行く、これがいわゆる「同心円」です。1945年8月9日の朝、米軍の原爆搭載機ボックス・カー号が高度9,600メートルから二つ目の原子爆弾を投下。午前11時2分に、計画どおり地上約500メートルの高さで炸裂し、一瞬にして長崎の街を焼き尽くしました。それからの出来事を、被爆者で浦上第一病院の秋月辰一郎医師は「死の同心円」と表現しました。同氏の著書『死の同心円』には次のように記されています。

「…『死の同心円だ…。魔の同心円だ』私は思わずそうつぶやかずにはいらなかった。まさに死の同心円が毎日少しずつ広がってゆく。きょうはあの線までの人が死んだ。翌日はその家より100メートル上の人が死ぬだろうと思っていると、はたして的中する。爆心地から広がりはじめた魔の波紋は、日一日と軽傷や無傷の人までも蝕んでいったのである。

この一文に触れただけでも、突如もたらされた原爆のおぞましが身に迫ってきます。長崎の平和ガイドはよく、原爆の威力を説明するために米軍が撮影した二枚の写真を提示しま



す。それはいずれも上空から爆心地一帯を収めた写真です。原爆投下前に撮影された一枚には蛇行する浦上川、中央に陸上競技場。そしてそれらの周りに無数の民家が立ち並んでいるのが見えます。しかし原爆投下後に写されたもう一枚では、川や大きな道筋こそわかるものの家々はすべて跡かたなく消え去り、平らになった土地だけが広がっています。その明らかな変化に誰もが驚かされます。私たちはぜひ想像したいのですが、その平らになった土地には、確かに10万人以上の人々の暮らしがありました。その多くを一瞬のうちに消滅させ、苦しみと悲しみの「死の同心円」が広がっていきました。

私たちはこのような原爆の惨禍を想いつつ礼拝のテーマを「死の同心円から平和の同心円へ」としました。これは長崎聖三一教会の教会案内にも書いていることですが、「私たちはいつの時代にあっても…聖書の言葉またキリストの教えに聴きながら…『死の同心円』の出来事を経験したこの長崎そして私たちの教会こそが、『平和の同心円』を広げていくように働いていきたい」と考えています。

今年は70年の節目となり、日本聖公会の8名の主教、大韓聖公会の主教と司祭をはじめ総勢106名が集まり心を合わせて祈ることができました。円にこだわり座席を丸く並べ、円形に作った台に献花をしました。礼拝の最後は円になって手をつなぎ、首座主教の祝祷をいただきました。手をつなぐと命がつながっていることを感じます。出席者は自らがまさに平和の同心円を形作る一人であることを自覚できたと思います。さらに同時刻の取り組みにより、各地の教会とも思いを連ねて祈りを捧げることができました。これからも多くの人々と一緒に、主の平和実現のために力を尽くしたいと思います。どうぞ皆さん、長崎へおいでください。

## ■ ■ ■ ■ ■ コラム わたしの瞳に映る景色 ⑫ ■ ■ ■ ■ ■

### ～ セクシュアル・マイノリティとは？ ～

中部教区 司祭 アンブロージア 後藤香織

今回から、しばらく「セクシュアル・マイノリティ」に関する基礎知識を、再確認しますが、まずセクシュアル・マイノリティとは何かを大まかに押さえておきたいと思います。その前に、セクシュアリティとは何でしょう。性のあり方を示すセクシュアリティは、性行為や生殖、性別という限定された意味だけで把握されることが多いのですが、もっと広く、心や生命を含んだ人間全体を包み込む広範な概念です。ですから、ここではセクシュアリティを、生殖や性行為という行為よりも、性的指向、性的自認等を含めた、人間全体、生活や人生の問題として考えていきます。

さて、人間の性別、セクシュアリティは、生物学的な性 (sex)、性的自認 (gender identity)、性的指向 (sexual orientation)、性別役割 (gender role) の4つの要素によって、大まかに分類することが出来ます。以下、生物学的な性 (sex)、性的自認 (gender identity)、性的指向 (sexual orientation) の3つの要素を、セクシュアル・マイノリティとは何かという視点から見てゆきたいと思

います。

I. 生物学的な性 (sex) : 生物学的な性は、受精のときに性染色体が XX であれば女性になり、XY であれば男性になります。しかし稀に、性染色体の通りに、女性もしくは男性に性分化しない場合等もあります。また、XX、XY 以外にも様々な性染色体の組み合わせを持つ人が知られています。

ですので、基本的には、女性か男性のいずれかに区別できますが、染色体の性別、ホルモンなどの内分泌の性別、卵巣や精巣等の内性器の性別、ペニス (陰茎) 等の外性器の性別で、女性と男性の違いが大まかに認められながらも、それぞれに中間的な状態がスペクトラム状にあり得るのです。しかし、日本では社会生活を営む上で、(性別の登録を保留することは出来ませんが、) 法律上女性か男性のどちらかに振り分けられてしまいます。

この身体の性別が、典型的でない状態は、「性分化疾患」と呼ばれます。当事者の多くは、自らをセクシュアル・マイノリティであると認識することは少なく、医療的なサポー



ト体制の充実を求めています。

II. 性的自認 (gender identity) : 性的自認とは、自分が女性であるか、男性であるかの認識です。一般的に体が女性であれば、自分自身を女だと認識し、反対に体が男性であれば、自分を男性であると認識します。性同一性障碍やトランスジェンダー (FtM, MtF) 等の場合は、この性的自認が体の性別とは違う認識を示します。また、性的自認が女性でも男性でもない、X ジェンダー (FtX, MtX) と呼ばれる人々もいます。生物学的な体の性別同様、性的自認にも中間的な状態があり、女性の自認、男性の自認とはっきりと二分することは出来ませんし、それは境目のないスペクトラムなのです。

III. 性的指向 (sexual orientation) : 性的指向は、異性に魅かれるか、同性に魅かれるかという意識です。「女性」だったら「男性」を、「男性」だったら「女性」を好きになるのが典型的で、異性愛と呼ばれます。一方で自分を「女性」と自認する人が「女性」に魅かれる場合や自分を「男性」と自認する人が「男性」に魅かれる場合は、同性指向、同性愛であると言えます。そして、やはりこの性的指向もスペクトラムであり、女性にも男性にも魅かれる人をバイセクシュアル (bisexual)、性別に関係なく人に魅力を感じる人をパンセクシュアル (pansexual) やポリセクシュアル (polysexual)、性的な魅力を感じない人をアセクシュアル/エイセクシュアル (A-sexual) と呼び、女性か男性かの二分法では括ることは出来ません。

よくセクシュアル・マイノリティは「不自然」だと言われることがありますが、自然 (神さま) は多様性を好まれるのに、社会 (人間) が多様性を容認出来ないということが、以上の例を見て言えるのではないのでしょうか。

以上 3 つの要素は、それぞれ独立したもの

であり、基本的には相互に影響し合わないと考えられます。例えば、わたし、後藤香織は自分を「女性」だと思っているので、「男性」が好きなのでしょうと、言われることがあります。また「男性同性愛者は、男性が好きなのだから、女性になりたいと思っている」という様に思われることも多いようですが、性的指向と性自認の間に、男女二分法の異性愛になぞらえる関連性はありません。

最初にセクシュアリティの 1 要素として挙げた性別役割 (gender role) は、上記の 3 つの要素とは違い、社会環境・生育環境に左右されるものと考えられます。性別役割 (gender role) は、性的自認 (gender identity) と混同されがちですが、別の要素であることに注意してください。ですから、体の性別が「女性」であり、性自認も「女性」、性的指向が「男性」に向く、典型的な女性が、男性の性別役割 (gender role) を担って社会生活を送るということもあり得ます。典型的な女性と男性の中にも、社会が求める「女らしさ」「男らしさ」という性別役割にとらわれたくないという人は沢山いますので理解していただけたらと思いますが、わたしのようなトランスジェンダーが、この性別役割の非典型ではないことに注意してください。

以上見てきましたように、人間の性は典型的な女性と男性の間に、どちらにも明確には分けられない状態をはさんで、様々な要素のスペクトラムで示されるものです。セクシュアル・マイノリティと一口に言っても、一人ずつ違う多様なセクシュアリティがあると考えていただくのが良いのでしょうか。そうは言っても、一人ずつ違う多様なセクシュアリティでは、捉えどころがなくなってしまいます。あくまでも参考であることを踏まえていただき、次回は代表的なセクシュアル・マイノリティを紹介します。



## 第23回女性フォーラムに参加して

女性が教会を考える会・東京 阿部ゆり

7月19日(日)、20日(月・祝)に岡山聖オーガスチン教会(神戸教区)で開催された、「第23回女性フォーラム・テーマ：彼女を記念して」の様子を皆さまにお届けします。

### 1日目：7月19日(日)

午後5時の開会礼拝から9時のコンプリンまで、時間があっという間に過ぎて行きました。夕食時の自己紹介は趣向を凝らしたものでした。受付時に、各自が選んだ折り紙の金魚の中に、グループ分けのアルファベットが書いてあり、更に人物名が書いてあります。つまりその人物になりきっての自己紹介なのです。グループA：お姫様 B：旧約聖書の女性 C：新約聖書の女性 D：権力者です。私が選んだ折り紙の金魚の中に書かれていた文字は、A・シンデレラでした。そうなんです！私は、シンデレラになりきり自己紹介をしたわけです。「お姫様グループ」に恥ずかしさもありましたが、実に楽しかったです。皆さんのなりきり自己紹介、お一人お一人本当に素晴らしかったです。

夕食後の発題は、下条聖職候補生がご自身の体験から「共依存」について話をしてくださいました。この発題を受け、コンプリンまでの一時、各グループ(夕食時のA～D)で話し合いの時を持ちました。話し合い後に各グループからの報告はしませんでした。限られた時間の中でそれぞれに充実した時を過ごされたことと思います。

### 2日目：7月20日(月・祝日)

各自の宿泊先から、9時の朝の祈りに間に合うように集合。朝の祈りの後は、各活動団体——日聖婦、女性が教会を考える会・東京、ジェンダープロジェクト、女性デスク、GFS——からの報告。また、北川姉(大阪教区)から、婦人伝道師の明確な情報を載せた要覧を作成中である、との報告と情報提供依頼がありました。

その後は、昼食時まで4つの分科会——暴力とジェンダー、意思決定機関への女性の参画、女性の聖職をめぐって、「牧師夫人」——に分かれ、話し合いの時を持ちました。

昼食後は、各分科会の報告と、来年のフォーラム開催場所についての話になりました。この2日目に、福井県の小林司祭、篠田姉が参加されていたことから、来年のフォーラム開催を北陸で引き受けてくださいました(開催地が直ぐに決まることは、皆さんのフォーラム開催への意欲の表れですよ)。

午後2時半からの閉会聖餐式は、大変感動的な礼拝でした。角瀬司祭(神戸教区)司式、上田亜樹子司祭(ハワイ教区)補式、大岡執事の説教でした。大岡執事は、カレン・キングの言葉を紹介されながらマグダラの聖マリアの話を力強く語られました(当日は、マグダラの聖マリア日の日課を用いての礼拝)。代祷は各自が作ったものを捧げました。

岡山での女性フォーラム開催は今回が初めてではありません。15年前にも開催されました。しかしその時は、女性司祭が参加されていたにもかかわらず、残念なことに聖餐式ができなかったのです。それから15年後のこの日に、女性司祭の補式が実現したのです。

今回のフォーラム開催にあたり、企画・進行・そして食事に至るまで、心豊かなおもてなしをしてくださった岡山聖オーガスチン教会の皆さま、ありがとうございます。この文章を読んでくださっているあなたと、来年、北陸でお目にかかれることを楽しみに！！

## 黙想会 小さな旅へのお誘い～十字架をめぐる～

9/4～5 福岡聖パウロ教会にて

福岡聖三一教会 クラウ 篠田茜



ニューヨークから景山恭子さんを講師にお迎えした。翻訳されたヘンリ・ナウエンの『イエスとともに歩む』で、イエスは、苦しんでいる世界を見つめることへの不安の中にいるわたしたちに「恐れずに、見つめ、触れ、癒し、慰め、訪ねなさい」と呼びかけておられる

ことが、十字架の道ゆききとおして語られている。この言葉を胸に、五感すべてを働かせ解放する24時間の旅に出発した。旅では、温泉のようにどっぷりと聖書につかり、招いているイエスさまのおもてなしを感じようと「ベツレヘム」「ナザレ」「エマオ」「バタニヤ」「カナン」の5つの「お湯」に分かれた。

前半はイザヤ書55章1節「渇きを覚えている者は皆、水のところに来るがよい」をめぐる黙想。何に渇いているのかいないのか、今は？以前は？これまでの人生や教会生活に思いをめぐらせた。またケネス・ベイリーの言葉、悔い改めとは「見つけられたことを受け入れること」が、ルカによる福音書15章の羊と銀貨と放蕩息子のたとえを通して語られていることが話された。神さまの招きがいつも最初にあることに素直になりたいと思った。

後半に語られた八木重吉、アブラハム・ジョシュア・ヘッセル、トーマス・マートン、マーティン・スミス、晴佐久昌英神父の言葉を聞いて黙想。痛みの多いこの世界で自分ができることのアマリの少なさを見つめ悩み続けること、到底耐えられないような事件のなかで、それでも犯人を赦すという人々がいることを覚えた。

黙想後は、輪になってからだを動かし、地球の裏側に今同じく生きている人たちを感じ、手を触れてお互いを感じた。神さまは輪のまんなかにおられ、誰もがそこから等距離にいるので、どんな人も実は近い存在であることを感じながら、この旅はおわった。

参加者は旅案内人、スタッフを含め37名、九州教区からは25名もの方々、西南学院大学神学部やカトリック教会から、また男性も3名参加という嬉しい会になった。

会場として食事や宿泊を含めて暖かくフォローしていただいた福岡聖パウロ教会の中村正司祭、教区事務所、教会のみなさまに心から感謝申し上げます。





## 女性デスクから



去る7月27日に、6年ぶりとなる第2回日本聖公会女性団体連絡協議会が東京の管区事務所で開催されました。

グループの活動報告や規約の確認など盛りだくさんの議題の中、ちょうど国会で審議中だった安保法(案)に対しても、協議会としてぜひ声を上げよう、ということになり、その後意見を集約して、8月6日に「わたしたちの声」というメッセージとして、安部首相ほか衆参の議長にお届けすることができました。文章はNSKKのホームページでも見ることができますのでぜひご覧ください。

さて、今年も教区会シーズンが近づいてまいりました。国連ではこれまでの『202030』(「2020年までに意思決定機関の30%を女性に」)からさらに進んで『203050』という目標を提示しています。教会が少しでもそれに近づけるよう、ご一緒に考え、行動していけたらと願っています。



## ジェンダープロジェクトより



戦後70年のさまざま取り組みが行われる中で、今号のタリタ・クムも戦後70年特集を組みました。日本軍性奴隷制度については、アジアの宗教と女性たちについて長年研究をされている山下明子さんから、また巻頭言には、大韓聖公会の趙明淑執事の原稿をいただき、あらためて、戦争と女性・ジェンダーの問題について考えさせられました。9月19日未明、国会では安保関連法案が強行採決されました。この法案可決に加担した多くの女性の国会議員の姿を見ると、この人たちは誰の立場に立って女性の活躍、子育て支援などを議論するのだろうか、と思いました。人間が行う最大の暴力である戦争と女性・ジェンダーの問題は重要な課題です。戦後70年だからと一過性に終わることなく今後も取り組んでいきたいと思えます。(この法案は、現在は「安全保障関連法」となっています)

### \*\* 編集後記 \*\*

#### 講演会のご案内

今年も「ジェンダー暴力と闘う16日間キャンペーン」(11月25日～12月10日)の一環として以下のような講演会を行います。

お近くの方、ぜひご参加ください。

と き：11月7日(土)13時半～15時半

と ころ：京都YWCA

(日本聖公会京都教区センター近くです)

テーマ：「ストップ! 女性や子どもへの暴力 子ども買春、児童ポルノなどの問題から考える」

講 師：斎藤恵子さん

(ECPAT/ストップ子ども買春の会共同代表)

参加費：300円 学生無料

主 催：ジェンダープロジェクト、女性デスク

問合わせ：木川田道子

日本の各地で「在特会」によるヘイトスピーチが頻繁に起こった時は、私は松本にいて、直接見聞きすることはありませんでした。遠くのどこかで起こっている特別なことと思っていたら、ある日、一人の政治家が松本駅の前で、「慰安婦なんてでっち上げ」「うそっぱち」という内容で真説をしていて、私は思わず、行こうとした道をワザワザ横断して、その人の前に立ち、「韓国で自分が慰安婦だったと最初に実名を名のって抵抗した金学順(キムハクスン)さんがいます。韓国では慰安婦たちが「ナヌメジップ(分かち合いの家)」に住んでいます。彼女たちに会いに韓国へ行ってから何が真実なのかを教えてください。何を根拠にウソだと言えるのですか」と大声で言いました。ヘイトスピーチ、ヘイトクライムを防ぐ社会的制度が必要であると思えます。